



陰謀論 民主主義を揺るがすメカニズム

秦正樹 著

中央公論新社（2022年10月）860円＋税／272ページ



評者



津田塾大学
学芸学部 教授
西川 賢

「陰謀論」への対峙は 身近で切実な課題

2021年1月6日、陰謀論を信じ込んだ暴徒が米連邦議会議事堂に乱入し破壊行為を繰り返した事件は、いまだ記憶に新しい。多くの人は、陰謀論に駆られて破壊の限りを尽くす暴徒を、自らとは無縁の、極端で恐ろしい他者だと思ったのではないだろうか。

だがそう考えるのは誤りかもしれない。著者によれば、われわれは誰でも陰謀論信者になり得る。そもそも、人が陰謀論を信じようとするのは自らにとって都合の良い情報を選択的に受容しようとするからであり、こうした傾向は多くの人が有しているからだ。現に、本書では日本人の3～5人に1人が陰謀論的信念を有しているとされ、多くの日本人にとって陰謀論は身近で、かつ切実な課題であると指摘されている。

著者は、日本人の陰謀論受容に関する先入観に基づいた誤認を正すことにも成功している。多くの人は、ツイッターのようなSNS利用者ほど陰謀論にとらわれやすいと思ひ込んではいないだろうか。著者によれば、ツイッターの利用頻度は陰謀論的信念を低めるといふ。陰謀論的信念を高めているのは、むしろ民放の番組視聴頻度や、

ニュース配信サイト「YAHOO!ニュース」のコメント欄、いわゆる「ヤフコメ」の閲覧頻度である。

さらに、いわゆる「ネットウヨ」（ネット右翼）やネット上の排外主義者がまき散らす陰謀論を受容しやすい層は、自らを「ごく普通の日本人である」と認識している層だといふ。加えて、リベラルな野党支持者ほど選挙制度変更を与党の陰謀だといふ言説を信じやすいことも実証されている。

「リベラルな陰謀論者」も実在するのだ。また、政治に関する知識や関心が、かえって政治的好奇心を呼び起こし、陰謀論を惹きつけてしまう可能性すらある。

自らを「ごく普通」「自分はリベラル」「自分は政治にちゃんと関心を持っている」と認識する人々が、客観的に見れば偏向しているとは思えない言論の拡散の担い手になっているとは、恐ろしい話ではないか。偽情報を信じて破壊行為のような愚行に打って出るのは、自らとは程遠い、極端で愚かな他者に相違ないと考え、陰謀論を身近な問題としてとらえることをやめるとき、われわれは陰謀論的思考様式に飲み込まれかけているのかもしれない。

世の「常識」を疑い、自らの「見識」をも疑う。厳しい現実が連なる現代社会を生きるわれわれにとって、そうした姿勢が求められるだろう。